

し祝ふ家毎に祝するにもあらず

〔臥雲日件録〕文明二年正月五日、熏日、三井寺乃教待和尚、初居此百餘年、既而智證大師相承興隆、此地大リヤウ創舊跡也、亦號蒲生長者也、凡正月廿日、人皆以爲飽食之日、實蓋始於此長者云々、平日以此日施于天下萬民、以飲食也云々、

六月朔日正月

〔半日閑話 十二〕六月朔日、世俗今日をもて元日とし、雜煮をいはふことのあり、元官中より出し事

となん、試筆

みな月の朔日ながら世とともにけふともふじの正月を見る

假作正月

〔叢桂偶記 二〕假作正月

凡世俗遇疫邪災疾凶荒之歲、則不問何月何日、假作正月、摸樣以爲除舊迎新、凶災可轉、相呼曰流行。正月、香祖筆記曰、老學庵筆記、陳師錫家、享儀、以冬至前一日爲冬住、又云、唐盧頊傳云、是日冬至除夜、乃知唐人冬至前一日亦謂之除夜、吾鄉三十年前、冬至節、祀先賀歲、與除夕元旦同、近乃不行、亦不知其所以然也、乙酉夏、二東多疫、忽有鄉人持齋素者、言以五月晦爲除夕、禳之則疫可除、一時村民皆買香燭祀神、祇祖先亦妖言也、乃知西土亦有流行正月、

〔嬉遊笑覽 八 術〕田舎にては、いつにても農業を休みてあそぶを、正月といふ、これ年の初め、遊び居

る事にたとへて云しにあらず、其起りは、何ぞの呪にてせし事と見えたり、寛文七年未七月六日、町觸、今度、在々所々にて、松飾りを仕り、正月を祝ひ申由にて、江戸近邊の町屋迄、其通り、此月は祝ひ申由、相聞候、就夫御代官所へも、無用可仕旨、被仰渡候間、江戸町中にて、右の通正月を祝ひ申事、堅無用に可仕候云々、始めは、かやうに松かざり、何くれと正月の如くせし事なり、

〔玉藥〕承元四年三月三日辛卯、或人曰、○中略又曰、賀茂氏人夢、三月三箇日、如元三、可儲禮儀云々、又五六月之程、世間拂底死去也、可恐之、